

またこれ程多く派遣された割に、これに関する当地方の残存資料は紙上提出の極く限られた一少部分に過ぎず、この表に掲出の年代のものは今迄の所かいま見ること出来なかつたのは永年地方史解明に取組んでいる私の遺憾とする所であった。

〔全国巡見使年表〕

- ①慶長八年二月 徳川家康征夷大將軍に補せられ江戸幕府成立
- ②元和元年五月 豊臣氏滅亡(元和偃武)
- ③元和八年六月 諸国巡視の使節派遣
- ④寛永十年 月日不記 「武家編年事典に拠れば江戸幕府此年初めて巡見使を諸国へ派遣して五畿方面は溝口伊豆守善勝、使番川勝丹波守広綱、書院番牧野織部成常の三名が之に当ると記す。」
- ⑤寛永十四年八月 巡見使を諸国に派遣する。
- ⑥寛永十八年二月 諸国に巡見使派遣
- ⑦正保元年二月 東国西国に巡見使を派遣する。
- ⑧寛文七年二月 諸国に巡見使を派遣する。

- ⑨天和元年一月 將軍代替りにつき巡見使を諸国に派遣する。
- ⑩元祿四年二月 勘定所役人を諸国に巡検させる。
- ⑪宝永七年三月 諸国に巡見使を派遣する。

舞鶴の米騒動について

藤田 欽也

一、はしがき
 昨年は米騒動がおこってから丁度五〇年をむかえた。このときあたり、今までに分っている範囲で舞鶴の米騒動について記しておく。今後は生存者がすくなくなりつつあることを考えれば、米騒動五〇年を機会に今のところほとんどおこなわれていない生存者からのききとり調査を積極的におしすすめる必要があろう。

二、原因
 第一次世界大戦による物価の騰貴は労働者の実質賃金を低下させ、民衆の生活を悪化させた。とくに米価の暴騰は著しく、一九一八

年(大正七年)三月に一升二〇銭であった米価は、七月にはいると四〇銭、八月のはじめには五〇銭をこえるところもでてきた。舞鶴においてもほぼ同様の米価の騰貴がみられ、当時舞鶴海軍工廠で働いていた労働者約六〇〇人のうち、加佐郡余部町(現舞鶴市余部)に住むところの約三〇〇〇人は、主に同町にあった海軍工廠の酒保で米を買っていたが米価暴騰のために、予約注文していた米すら手に入らない状態になっていた。このため海軍工廠で働いていた労働者の中には不満が増大していった。一升五〇銭という米価は日給に直して平均八〇銭の海軍工廠の労働者にと

つたえられないものになっていた。

米価暴騰の根本原因は、大戦中の資本主義発展による都市人口の増大にもなる米の需要増加に対し、半封建的な寄生地主制のもとでの米の生産が追いつけないところにあった。それに加えて、大商人や一部大資本家のシベリア出兵をみこした米の買占めが、ますます米価の騰貴に拍車をかけたのである。米価暴騰で深刻な生活難におちいった民衆の不満が一挙に爆発したのが米騒動である。

三、経過

一九一八年(大正七年)七月二二日、富山県の魚津町で沖仲仕などをした家計を助けていた漁村の婦人が、米の県外積出しに反対して運動をおこし、警察によって解散させられたのが全国の米騒動のはじまりである。八月二日、寺内内閣はシベリア出兵を宣言したが翌三日には同じく富山県の中新川郡西水橋町で漁村の婦人約三〇〇人が、資産家や米商人の家におしかけ、米の県外移出禁止と廉売を要求し、六日には滑川町にも波及して町当局に時価より五銭安の三五銭で米の廉売をやらせた。七月二三日から八月八日までの、騒動が富山県内にとどまっていた時期を、米騒動の第一段階とよんでゐる。

八月一〇日ごろから米騒動は大都市にも波及し、特に一三日ごろからは地方の中小都市へもひろがった。この八月一〇日から八月一五日までが米騒動の第二段階で、この時期に民衆の蜂起がもっとも集中しておこっている。八月一〇日には名古屋で市民大会が開かれ、二万人の市民が公園に集まり、そこで米価引下げを要求する労働者や学生の演説があり、京都でも同日夜、柳原の被差別部落民がまづ立上り、民衆は米商人の店におしかけて表戸をこわし、警官の斡旋で一升につき五銭の値下げを承認させ、その後各所の米屋へおしかけて「白米一升三〇銭で売ります」という貼り紙を出させた。一日には大阪で約三〇〇〇人の民衆が集って市民大会が開かれ、聴衆の多くはその後街頭にて米商人のところにおしかけて、米の廉売を要求した。一二日には神戸で数万の群衆がデモ行進をおこなった。外米指定商鈴木商店の元本宅が焼かれ、「神戸新聞」の三層楼も焼打ちにあった。

で市民大会が開かれ、集った群衆から騒動がおこった。一三日までに福島・豊橋・岐阜・大津・富山・高岡・金沢・福井・和歌山・堺・尼崎・姫路・岡山・尾道・呉・広島・鳥取・高松・丸亀・高知などの地方都市でもおこり、一四日には浜松・岡崎・奈良・福山、一五日には仙台・若松・横浜・横須賀・甲府・津・松山・門司、一六日には下関・小倉、一七日には新潟・長岡・長野、そうして二〇日ごろには佐世保・熊本などの各都市に波及している。

このためここに軍隊の出動をみて、多数の検査者を出して鎮圧された。こうして米騒動は移出とりやめや安売りの要求運動から打ちこわしへとすすんでいった。一三日になると、米騒動は首都東京にも波及して、日比谷公園

さて舞鶴の場合には、第二段階にはいって地方の中小都市にも波及していった八月一三日におこっている。発端は、海軍工廠の労働者およそ一、〇〇〇人が同日午後八時ごろ、二時間の残業を終えて工廠の西門を出ると、工廠で働く人夫の斡旋団体である「一心会」の幹事が、近くの同町警部補派出所の前で、「米屋の決議で、明日から米が一升三五銭になりましよ」と伝えたことからはじまった。それをきいて多くの人が集まり、そのなかには「三五銭は高い。三〇銭以下が適当である」と演説する人もでてきて、騒々しくなり、その数も工廠の労働者だけでなく、町民も加わっておよそ三、〇〇〇人の集団となった。

当時派出所は工廠の酒保の西およそ一〇〇mのところであったが、その前の広場に集った群衆はふたたび酒保のところへ戻って、酒保の人に米の廉売を要求した。おしかけた群衆のなかには、投石するもの、電燈をこわすもの、屋内に入つて家財を投出すものもあつて、ついに店のものに白米一升を二〇銭で廉売させる貼紙を出させた。京都市の場合でも一升を三〇銭にさせたの比れば、それよりまだ一〇銭も安いのは注目値いしよう。

その後、群衆は二手にわかれ、一隊は北上して長浜の米などが納めてある酒保倉庫に向い、別の一隊は南下して余部町内の米屋へおしかけた。北上した群衆は途中で、海軍の衛兵五〇余名によつて阻止されてしまった。

群衆のなかには腹を立てて投石するものもあつたが、それに対して衛兵らは銃に剣をつけて群衆に向つてきたので、群衆は口々にそれを非難した。とくに先頭にたつていた人のなかには「何故国民の軍隊が国民を突くのか。衛兵司令官の回答を待つ。」とするとどく詰問するものもあつたという。全国的にみると、米騒動の鎮圧に軍隊が出動した地域は一〇七市町村におよび、出動人員は五七、〇〇〇人をこえると推定されている。なかには沖の山

炭鉱のあつた宇部市のように、八月一七日坑夫や貧民など数千人が炭鉱主の邸宅をこわし一八日にはいると、出動した軍隊によつて、坑夫一三人が射殺されたところもあつた。

一方南下した別の一隊は、上一丁目の米屋へおしかけた。そのときには、その主人一家は酒保での事件をきいて、前もって隣家に難をさけていたが、群衆のなかには店に投石したり、店先の雨戸をこわしたり、丁度到着したばかりの一貨車分一三〇俵の米の一部をもち出して、道にばらまくものもいた。彼らはさらに四軒の米屋におしかけたが、それらの店では、先手をうって「一升二〇銭なり」の貼紙を店先にだしていたので、打ちこわしをまぬがれた。その後上一丁目の米屋でも、「明日より白米一升二〇銭なり」の貼紙をだしたところ、夜中の一二時頃早くも、この安い米を買おうとして一〇〇余名がおしよせた。そうして、そのなかの数人は「米を売れ。売らなければ、八円(米一升二〇銭として一俵分)をおいて米俵を持ち帰ればいだろう。皆さん、一俵づつ持っていこう。」とくり返し大声でいった。その声におされて、店員の一人が「明朝六時から売り出す」旨の貼紙をだしたが、工廠の労働者たちは「私たち職工

は午前五時に工廠へ出勤しなければならぬから、六時まで待つておれない。」といつて納得しなかつた。「近所の綿屋に米屋の主人がいるので、そこへおしかける。」といつてるとき、およそ四〇名ほどの兵士がやってきて、群衆を制止した。群衆の怒りをおさえる意味もあつてか、兵士の方も売ることをすすめたので、その米屋も売出しをはじめ、白米八〇俵と糯米七・八俵を一俵八円で売り出した。そのため、他の米屋でも同様に、同夜米を売り渡した。その後も二日ほど不穏な状態が続いたので、衛兵の町内見廻りが継続されたという。

余部町の米騒動の知らせは、隣りの新舞鶴町にも伝わり、それを聞いた群衆およそ一、〇〇〇人は同日午後一時過ぎ、同町の米商人工方におしよせ、投石したり、格子戸をこわしたりして米の廉売を強要した。その米屋は初め一升三五銭の貼り札をだしたが、群衆はそれに承知せず、結局余部町と同様一升二〇銭で売ることになった。ところが群衆のなかには「売る石数を知らせる。」といつて投石するものもあつたので、店の方ではあるだけの白米を売ろうとして五俵ほど売ったところへ、巡査部長がやってきて、「二〇〇俵

を一人三升づつ売るから解散せよ。」といつた。しかし群衆は「警察で売ることを保証しなければ、解散しない。」とか、「一軒に三升か、一人に三升か。」といつて、なかなかに解散しなかつた。その後署長の鎮撫演説でやっとおさまったが、ときに午前二時ごろであつた。なおこの米屋だけでも二〇〇俵の白米が売られたという。

しかし、米の廉売の恩恵にあづからなかつた一般の町民は、「かえって高い米を食べなければならぬ。」といつて反対し、米屋に米価の引下げを迫つたので、新舞鶴町の米屋一〇軒は逆に怒り、一、〇〇〇俵の米を大阪に移出、販売しようとして、二七日貨車に積込もうとしているところを町民にみつかつて大騒ぎとなり、町長や署長の仲裁で、一時それをとりやめたが、その後も不穏な空気が続いたという。

全国的には一六日以後、米騒動は第三段階に入り、騒動は地方の町村や山口県、北九州の炭鉱地帯にひろがった。町村の騒動は小作農や貧農が中心となつて、大地主や高利貸を対象にしておこつてゐる。炭鉱での闘争は、山口・福岡・佐賀・熊本四県の一〇余カ所でおこり、九月六日には北海道空知の沼見炭鉱

にもひろがり、九月一二日の三池炭鉱の騒動を最後にして、米騒動は終りをつげた。

四 性 格

米騒動のおこつた地域は一道三府三七県にまたがり、ほぼ全国の四分の三におよび、三八市、一五三町、一七七村で、合計三六八市町村に達している。参加人員も一〇〇万人をこえたといわれている。検事処分をうけたものは八、二五三人、そのうち起訴されたものは七、七七六人であつた。懲役刑に処せられたものは二、六四五人、そのなかには無期のものが七人もあり、和歌山県の未解放部落民二人が死刑の判決をうけた。舞鶴では私服の警官がひそかに白墨やインクで主な活動分子の背中にしるしをつけてまわり、翌日早朝の工廠の出勤時に門のところに待機して、その目印をたよりにして一斉に検挙した。そしてそれらの検挙者から他の参加者の氏名をききだして、総数一〇〇余名を検挙したのであつた。有罪となつた人びとの中には、米の買い出しにきていただけのものもあつたという。米騒動の性格についてみると、全国的には蜂起の主力は、労働者・農民・漁民・職人・小商人などひろく民衆各層におよんでゐたが、舞鶴の場合には、海軍工廠の労働者が

群衆のなかで蜂起の主力になつてゐる点が特長である。ただし、その場合にも職場で蜂起したのでなく、夜工廠から出たあと、その地域の住民として参加したのであつた。また全国的にもそうであるが、舞鶴でも米騒動は行動を計画し、指導する組織もなかつたので自然発生的な性格をもつてゐた。そのため一揆的で持続性がなかつた。

すでに一九一五年(大正四年)四月、友愛会(労資協調主義を立前としていた)の京都支部が舞鶴の海軍工廠の労働者によつてつくられ、二年後の一九一七年(大正六年)の初めには一、二〇〇名をこえていた。しかし友愛会が労働組合としての性格をもつてくるにつれて、工廠当局は第二組合的な工友会をつくつて友愛会の切崩しをおこなつたため、脱退者が続出し、友愛会京都支部は大打撃をうけて、会員も二〇〇人ほどに減つてしまつた。米騒動のあと、友愛会京都支部幹事の〇氏が米騒動の指揮者(もっとも〇氏は指揮者ではなかつたが)として起訴されたために、友愛会京都支部はつぶれてしまつた。

五 意 義

当時の寺内内閣が、八月一四日米騒動に関する記事をさしとめたことから、諸新聞は一

齊に寺内内閣を批判し、内閣総辞職をせよ
た。こういうなかで寺内内閣も九月二日、
ついに総辞職におこまれた。

米騒動はその後の労働運動や農民運動の発
展のため大きな刺激となり、労働者は自分た
ちの権利と自由を守る労働組合をつくり、よ
り組織的な大衆行動をおこなうにいたるので
ある。

大正から昭和にかけての舞鶴における歴史
遺産をほりおこす仕事は全国的にみても大変
遅れていると思う。今後の成果を期待して筆
をおく。

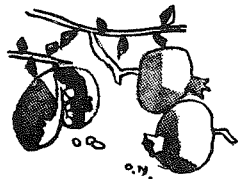
〔参考文献〕

- 1 田沼肇著「米騒動・社会運動の発展」
(岩波講座「日本歴史現代」) 所収)
- 2 井上清著「日本の歴史(下)」(岩波
新書六〇六)
- 3 今井清一著「日本の歴史・二三」(中
央公論社)
- 4 井上清・渡部徹編「米騒動の研究・第
一卷」(有斐閣)
- 5 舞鶴造船分会編「組合二十年史」

舞鶴地方史才八号
： 正 誤 表

頁段行	誤	正
1 上 16	概要	概要
2 下 18	未だ縄文	未だ縄文
10 上 11	江戸時	江戸時
10 中 14	法令	(法令)
10 中 5	送迎の者	送迎の者
10 中 6	右之面々	一、右之面々
10 中 4	味會、	味會、薪
10 中 5	次第買候	次第買候
10 中 7	無之商売	無之商売
11 中 2	城絵図	城絵図
11 中 7	一切可為無	一切可為無
11 中 9	興したと	与したと
11 中 22	徳川実記	徳川実紀
13 中 24	御当地の通行	御当地御通行
13 下 3	より由來	より申來
13 下 25	本藩の	本藩の
14 上 15	駕籠	駕籠
14 上 20	哉と乃尋に	哉と御尋に
14 中 14	両藩主が	両藩士が
14 下 1	駕籠	駕籠
15 上 19	内蔵丞	内蔵丞
15 上 20	ず、下は仲間	ず、下は仲間
15 中 10	北有路村乃	北有路村御
16 上 6	昔変らない。彼	昔も変らない彼

頁段行	誤	正
16 中 16	天台寺、天台寺	天台宗、天台寺
16 下 2	村々御制、札	村々御制札
16 下 21	七代似成	七代以成
17 上 1	町数合ヶ町	町数何ヶ町
17 中 5	天保四己年	天保四己年
17 下 9	出る場所	出る番所
18 中 7	水晶山有之事	水晶山有無事
18 下 18	牧野山城守	牧野山城守
19 上 6	御婿男様	御婿男様
19 上 7	天保四己年	天保四己年
19 中 18	芦田興右衛門	芦田与右衛門
20 中 19	記された	遺された
20 上 8	一ヶ月所有之	一ヶ所有之
20 中 19	今の処でどの程	今の処明かでないのどの程度
21 上 17	桶狭の戦	桶狭間の戦
21 中 1	吉田城外	吉田城外
24 上 20	御出入加ニ被為	御出入加ニ被為
24 中 6	石戸家	石戸衆
24 下 5	寛永十八年己年	寛永十八年己年



△ 例会だより △

- ◇ 十二月二十一日 西公民館 (市民会館内)
「当地方史料よりみた江戸幕府巡見使について」(井上金次郎氏)
史料情報の交換。
- ◇ 一九六九年 四月五日 西公民館
「丹後地方における検地について」(真下八雄)。当地方の近現代史料蒐集のための「聞き取り調査」の実施について協議。会費
年四百円(百円値上げ)決定。

△ 編集後記 △

ここ十数年来、国家の文教政策反動化のもとで、昨年特に「小学校学習指導要領」改訂によってうち出された「日本神話」復活問題が歴史学会、革新諸団体等から鋭く批判され、また神話教育復活反対運動も展開されるに至りました。

しかし、中嶋氏の論文は、この事が学校教育の現場においては、往々にして、すぐれて民族的文化遺産としての神話の否定ないし軽視の傾向にあることを危惧され、神話、伝承の科学的実証的研究と、その成果の教材化の必要を強調された上で、丹後地方が全国に誇る「浦嶋」

伝説を論究されたものですが、本論文をとりわけ教職にある方々の参考に供したいと思えます。
「世界史にいくつかの史実を書きかえた壮大なる進歩と発展の実蹟」(佐藤首相「明治の偉大さを顧みて」)「解説政府の窓六六年一月一日号」が謳歌、礼讃されている明治百年史の中で、国家・社会体制の矛盾、害悪に挑戦し、その克服に献身した諸先輩の舞鶴地方における反体制運動の真実は、満足な記録もなく、また関係者の年々の逝去によって当地方から消滅しようとしています。
本研究会は今年度の一事業として、右の諸運動中、就中大正と昭和初期の社会主義・労働大衆・全国水平社・反戦平和運動等の諸闘争史料を蒐集し、これを順次本誌に掲載して市民に運動の実態を明らかにすると共に、後世にも伝達したいと計画していますが、藤田氏の「米騒動」の論文をその出発点として、この事業を積極的に推進して行きたいと思えます。

(真下八雄記)

